

大学生の読書記録・読書レビューに関するリサーチ報告

阿加井愛香*, 渡辺哲成*, 大塚光*, 小磯麻佑子*

*日本事務器株式会社

*jisui-bunkyo-gr@njc.co.jp

近年、大学生の読書率の減少が指摘されている。日本事務器株式会社（以下、NJC とする）では、2019 年から 2020 年、複数の大学と学生の協力のもとデザイン思考の手法を用いて大学生の読書推進のためのリサーチを実施した。本報告では、リサーチを通して得た「大学生による読書記録・読書レビューに関する意識」、そして「私たちがこうしたプロセスを通して得た気づき」について報告する。

Research report on reading records and book reviews of college students.

Aika AKAI*, Tetsunari WATANABE*, Kou OTSUKA*, Mayuko KOISO*

*Nippon Jimuki Corporation

1. はじめに

NJC[1]では、約 20 年に渡り弊社が提供する図書館システム（製品名：ネオシリウス／ネオシリウス・クラウド）[2]を大学図書館や専門図書館の皆様に利用いただいている。そして、日頃お世話になっている図書館コミュニティに対し何らかの貢献をしたいとの思いから、2010 年頃より読書推進の活動を行っている。

この度、その読書推進活動の一環として、複数の大学と学生の協力のもと、デザイン思考の手法を用いて、大学生の読書推進のためのリサーチを実施した。

本稿では、リサーチを通して得た「大学生による読書記録・読書レビューに関する意識」、そして「私たちがこうしたプロセスを通して得た気づき」について報告する。

2. リサーチ概要

2.1 リサーチの目的

最初にデザイン思考について少々解説したい。デザイン思考とは、デザインコンサルティング会社の IDEO[3]が 1990 代より提唱し世界的に普及したビジネスデザイン手法である。私たち企業は、しばしば「新しい技術を使った新製品」や「自社の強みを活かしたサービス」というように一方的に企業側の論理で商品づくりを行ってしまうことが多い。また「おそらくユーザーはこういうものを欲しているだろう」という根拠の薄い推測を元に商品化を進めてしまうこともありがちである。

デザイン思考では、「ユーザーの行動や感情」、「ユーザーの本質的なニーズ」に注目してソリューションを作っていく点が特徴的で、特に VUCA 時代[4]におけるモノづくり、サービスづくりへの有効性が広く認知されている。

今回は、全国大学生生活協同組合連合会の「学生生活実態調査の概要報告」[5]等で明らかになっている「大学生の読書離れ」という課題に対して「読書履歴や読書レビューの活用」に関する問いを立て、デザイン思考の中心メソッドであるデザインリサーチやプロトタイプング（試作品を使った観察）を行うことにした。

2.2 参加者とリサーチ内容

2019 年 12 月から 2020 年 5 月、図書館スタッフと現役大学生を対象として、合計 24 名にリサーチを実施した。場所は大学図書館内もしくは大学構内での直接対面を基本としていたが、後半はコロナ禍のためオンライン会議も併用した。

内容は、読書や読書記録、読書レビューについてのインタビューと、弊社で制作した試作品（読書記録／レビューが登録できる簡易スマートフォン用アプリ）の操作体験である。

なお、大学図書館スタッフと現役大学生ではリサーチの方法を分けて実施している。

図書館スタッフに対しては、1 館あたり 2 時間程度、既存の業務や学生の読書状況についてインタビューを行った。また、試作品を使用してもらい、主に「読書推進に関する ICT サービスの管理者としての意見」を収集した。最終的に 3 大学 13 名のスタッフに参加してもらっている。

次に大学生に対しては、実際に試作品のスマ

ートフォンアプリをそれぞれの学生個人所有の端末にインストールし、1週間～4ヶ月の間、日常生活の中で使用してもらい、使用者としての意見をLINEなどのチャットアプリも併用して随時収集した。こちらは3大学11名に参加してもらうことができた。

3. リサーチ結果

3.1 読書記録はアプリ派？手帳派？

リサーチ本番の前、2019年11月の図書館総合展にて、読書記録・読書レビューに関するアンケートを行った。その結果も示唆に富んでおりリサーチ本番に向けて大いに課題理解のためのヒントとなったので紹介したい。

図書館総合展の弊社ブース内にて、読書記録・読書レビューに関するアンケートを行った。この場には十文字学園女子大学との産学連携プロジェクトで制作した「オリジナル読書手帳」と今回の試作品を並べて展示し、実際に手帳とアプリを手にとってもらいながらアンケートに答えてもらった。[6]

参加いただいた約100名分のアンケートからは、以下のような感想が得られた。

- 年齢性別を問わず、9割以上の回答者が何らかの形で読書記録を残したい、また記録を残すことが有用だと考えている
- アプリと読書手帳（紙）のどちらが好みかという点、回答者全体では手帳派55%、アプリ派45%で手帳派がやや優勢だが、学生に限定すると逆転し、約60%がアプリを選択していた
- 手帳派、アプリ派がそれぞれ選んだ理由を「手帳は手軽だから」「アプリは手軽だから」という同じ「手軽」という言葉で支持していたのが興味深かった

3.2 大学図書館

3.2.1 リサーチ結果

リサーチによって得られた「大学図書館スタッフ」としての課題意識について述べる。

まず、リサーチに参加した全てのスタッフが「もっと図書館を利用して欲しい」と考えていた。ここで言う「図書館を利用してほしい」とは、数量的に表せるものとしては来館者数、貸出数、レファレンス件数の増加等を指しているとのことであった。中でもレファレンスサービスについては、利用者のサービス理解が不足し

ていて利用が伸びないことと、図書館を使わないユーザーへのアプローチが難しいと感じているスタッフが過半数だった。

また、サービスを改善するよう努力しているものの、予算・人員などのリソースが不足し、利用者のニーズに対応しきれていない部分があるとも感じていた。具体的には、夜間などの開館時間の拡張希望に応じられない、資料やDBの品揃えについても限りがある、などである。また、人手が少なく、雇用短期化による頻繁な人事異動、委託業者の変更などで、人材育成や教員との関係構築など長期的な計画が実行できていない、という意見などもあった。

3.2.2 リサーチ結果と得られた気づき

リサーチの結果から社内でディスカッションを行った結果、私たちの中で以下のような気づきを得た。諸兄姉らには「何を今更」と思われる内容と思うが、一部抜粋して掲載する。

- 図書館の本質的な最終目標は、利用数（貸出冊数・来館者数など）を増加させることではなく、図書館のサービスを使って利用者を支援することにより、利用者の学習や研究を促進・充実させることにある
- 問題解決の情報収集の手段、また教養と知識を高める方法として、利用者に読書習慣を身に付けてほしいと思っている
- 図書館のリソースは余裕がなく、新たに業務負荷のかかるサービスに取り組むとしたら、消極的な意見もある

3.3 現役大学生

3.3.1 リサーチ結果

リサーチによって得られた「大学生」の「読書」「読書記録」「読書レビュー」に関する意識について述べる。

まずリサーチに参加した学生の全員が「読書」が有益なものだと認識していた。一方、「時間がかかる」、「どうやって本を選べばいいのか悩む」、「内容が事前の想像と違って最後まで読めない」、「読む場所を選ぶ」などといった理由から、読書をためらう意見も多く寄せられた。

また、図書館総合展でのアンケート同様、全ての参加者が「読書記録を付けることは価値がある」と考えていることも明らかになった。その理由で多かったものは、「過去の学習履歴の振り返りの有用性」、「蓄積された履歴による達成感」、「役に立った本や感動した本を他人にすすめる時の記録として活用できること」など

が挙げられた。また、少数だが「レポートや課題のために本を読んでいる際に、どのページに何が書いていたのかメモしておく」として参考文献としても転用できる」という意見もあった。

3.3.2 リサーチ結果と得られた気づき

リサーチの結果、NJC 側では以下のような気づきを得ることができた。

- 学生の読書ニーズには「差し迫った学習課題に対する顕在ニーズ」と「未来の自分や卒業後のキャリアに影響を与えうる潜在ニーズ」がある
- 本に限らず、商品レビューはとにかく質が重要である（内容の薄いレビュー、信頼性の低いレビューはノイズ）
- 「アウトプットが得意でレビューを積極的に書くタイプの学生」と「自分では積極的にアウトプットしないが他人が書いたレビューを有効に利用する学生」が存在する
- 公開して他人に見せるための「レビュー」と、自分のための「記録」は別物

3.4 気づきのまとめ

3.4.1 2つの「サービス要求とサービス供給」の関係

前段までで得られた気づきを総合して、私たちは図書館と大学生の間、また大学生同士の間で2つの「サービス要求とサービス供給」の関係を見出した。

まず1つ目は、図書館と大学生の間で発生する、「学習・読書支援をしたい」図書館と、「課題に困っている。どの本を読んだら良いかわからない」学生との関係。ただ、ここには図書館側の学習支援のためのリソースやスキル不足により満足にサービス提供できていないケースがあることが分かった。

2つ目は、「本に対する質の高いレビューを探していて、特に同じ学部の教員や先輩など自分に近い属性を持つレビュアーの意見を求めている」という学生と、「自分の書いた発言に他人から良い反応をもらえると大きな励みになる」と考えている自分の意見のアウトプットに積極的な学生である。この二者間にも、サービス要求とサービス供給の関係が存在しているが、現在はこのマッチングを叶える適当な場が存在しない。

3.4.2 「顕在ニーズ」と「潜在ニーズ」

また、学生の読書ニーズには、目の前のレポ

ートや課題のために必要な文献や情報を意識的に求める「顕在ニーズ」が存在し、学生は日常的にその「顕在ニーズ」に基づいて本を探す。

しかし、その時点では本人も気が付いていないものの、偶然的な良書の出会いによる「視野の拡張」や「自己実現」といった観点から、「将来のキャリアに大きなインパクトを与えうる良書との遭遇」という、いわば無意識的な「潜在ニーズ」も存在することが、今回のリサーチで学生にインタビューを重ねていくことで明らかにすることができた。

4. リサーチ後の展開

リサーチを終えた現在、私たちは、図書館や大学生の読書を取り巻く環境の中で、それぞれのプレイヤーによって本に対するレビュー需要と供給に対する「思い」はマッチしているものの「リソースやスキル不足」「適当な場所がない」などの問題でうまく関係が成就していないことに着目し、ソリューションの開発に着手している。

その成果として現在生まれつつあるのが大学生のための読書レビューアプリ『BOOK MARRY (ブックマリー)』である。同一コミュニティでの上質な読書レビューを蓄積し、学習支援を実現することを目指したサービスを目指している。

本年度、実際の大学での実地検証を通じて、サービス内容の細部やビジネスモデルを詰めながら、今秋に正式ローンチしていきたいと考えている。

5. 終わりに

本リサーチの結果、一番印象的であったのが年齢性別を問わず、全回答者が「読書は有益である」と答えていたことである。そもそも図書館総合展の参加者や、このようなりサーチに協力してくれる図書館スタッフや学生という時点で「読書」に対してプラス評価のバイアスが強い参加者であることは否めないが、それでもインパクト十分の結果だった。しかし、誰もが有益と考える読書がその効能を十分に発揮できているかというと、かなり課題があることがわかる。

今後、それらの課題の解決方法として弊社サービスの展開が叶い、ひいてはそのサービスが学生の学力向上や豊かな人生観を身につけることの手助けとなることができればこの上ない幸せである。

注・文献

- [1] 本社：東京都渋谷区. 代表取締役社長：田中啓一. 資本金：3.6 億円. 略称：NJC.
<https://www.njc.co.jp>.
- [2] 図書館情報システムネオシリウス“ネオシリウス・クラウド”. NJC.
<https://www.njc.co.jp/neocilius/>（参照 2021-05-27）
- [3] “Our Approach, IDEO Tokyo のビジョン”. IDEO.
<https://jp.ideo.com/post/our-approach>（参照 2021-5-27）.
- [4] VUCA（ブーカ）時代：変化が激しく先行きが不透明で、将来の予測が困難な時代のこと。Volatility：変動性，Uncertainty：不確実性，Complexity：複雑性，Ambiguity：曖昧性の頭文字を取って付けられた言葉。
- [5] “プレスリリース, 学生生活実態調査の概要報告”. 全国大学生生活協同組合連合会.
<https://www.univcoop.or.jp/press/index.html>（参照 2021-5-27）.
- [6] “2019 年産学連携プロジェクト 図書館へ行こう！オリジナル読書手帳”. NJC.
<https://www.njc.co.jp/neocilius/scene-detail/scene-detail-1734/>（参照 2021-5-27）.